

日本経済大学と海外教育機関との交換留学プログラムに 関する現状分析と展望

Analysis of Exchange Programs between Japan University of Economics and
Overseas Partner Universities

椿 健太郎[※]

Kentaro Tsubaki[※]

Abstract

As a successor to the National Center Test for University Admissions at Japan, the National Center for University Entrance Examinations began in fiscal 2021 with the aim of measuring not only knowledge but also ability to think, judge and express oneself. This is one of the major moves to encourage the internationalization of Japan by fostering the ability to utilize English, rather than memorizing it as knowledge.

Since sending exchange students to partner universities for the first time in 2016, Japan University of Economics has been promoting internationalization of its campus by making its campuses multinational and enhancing its English curriculum. As a result, the number of students interested in and participating in study abroad programs is on the rise (especially there is a growing need for long-term study abroad).

Based on a survey of students who participated in the exchange program with our overseas partner universities at our university, I will examine what kind of system is required for the International Department, which is in charge of international exchange programs with overseas partner universities, to further promote international exchange.

Keywords : MoU, overseas partner universities, international exchange program, university, study abroad

1. 背景と目的

文部科学省の方針の下、グローバル化を推し進めてきた結果、2010年に約2.5万人だった日本の大学生の留学者数は2018年に約11.5万まで伸び、その後2020年に至るまで順調に伸び続けていた。しかし、2020年初頭に発生した新型コロナウイルス感染症の影響で、留学を予定していた学生の大半が中止ないしは無期限延期を余儀なくされ、さらには留学をしている学生も緊急帰国するなど、日本のみならず世界中のすべての大学において留学実情が激変した。

現地留学に関しては、アメリカやカナダなど一部の国・地域では留学やビジネス目的であれば受け入れを継続しているが、外務省が発表した「新型コロナウイルスに係る日本からの渡航者・日本人に

※日本経済大学経営学部グローバルビジネス学科

対する各国・地域の入国制限措置及び入国後の行動制限」により、日本のほぼ全ての大学は新型コロナウイルスの影響がある地域への渡航は学生の安全を守るためには避けるべきだと判断し、現地留学を無期限に延期している。意欲的な学生はそのような状況下でも現地留学の検討だけでなく、現地留学に変わるプログラムを模索しており、多くの海外教育機関も彼らのニーズに応えるため留学に代わる価値の提供を模索している。その結果、今まであまり提供されていなかったオンライン留学やオンラインライブ授業などが提供され、いつでも世界に繋がることができる新たな可能性を見だしつつある。今後は海外の教育機関とオンライン共同学習など教員レベルや学生レベルで様々な交流が出来る環境が整うことで、今までとは異なる交流が始まる可能性もでてきた。

日本経済大学でも2020年は原則オンライン講義（一部の講義はハイブリッド型講義）にて開講し、そのノウハウを活かし本学とMoU協定を締結している海外協定校の学生を対象に「日本語オンライン講義」を実施するなど海外協定校との国際交流をコロナ禍でも継続してきた。実際にオンライン講義に参加した留学生からの満足度も高くオンラインでも十分に学べる環境が整いつつある現在、改めて今後再開される現地留学に対して何をすべきか、何を提供すべきかを再考する時期が来ている。とくに現地留学は語学取得だけでなく、異文化への理解や海外にて困難を乗り越えることにより得られる経験、さらには日本の良さを再発見できるなど、実際に現地に行かねば体験できない利点が多くある。

本稿は、このような急速な留学環境の変化にあたり、日本経済大学（特に留学生の受け入れや送り出しの中心となっている福岡キャンパス）の海外協定校との交換留学プログラムの現状分析及今後の展望について実際に交換留学に参加した学生のアンケート結果から、国際部として今後の海外長期留学での質の保証や向上を検討する。

2. アンケート対象

日本経済大学では、海外の教育機関と連携・共同して様々な短期・長期の教育プログラムを本学の学生に向けて提供している。主なプログラムは以下の3種類である。

- ① MoU協定のもと学生交換協定を締結した海外の教育機関への長期交換留学
- ② MoU協定のもと海外の教育機関から提供される短期留学
- ③ 留学に必要な手続きをすべて学生自身が行うことを前提に、海外の大学や高等教育機関から自由に留学先を選択する認定留学

しかし、本学と海外の協定校が共同で実施する②の短期留学プログラムは、研修の目的が言語研修や経済研修など多岐にわたり、各研修を同じプログラムとして比較することは難しい。また③の認定留学についても本学との組織的・継続的な教育連携の関係にないため、統一的な留学プログラムの評価を行うことは相応しくない。

一方、①の学生交換協定に基づく長期交換留学プログラムについては、ERASMUS計画による「ヨーロッパ単位互換制度（European Credit Transfer System 以下ECTSと略記）」に基づき学位を取得できる環境をヨーロッパの高等教育機関を中心に整えられており、大学のカリキュラムに関する情報を共有し、共通の単位及び成績認定が双方の大学間でできる環境が整えられている。さらには、ECTSを導入していないアジアやアメリカなどの高等教育機関については、UCTA（Universal Credit

Transfer Agreement) やACTS (ASEAN Credit Transfer System) を設立し異なる教育環境の相互理解と公平な評価を目指し、学生が自由に行き来できる高等教育権を構築し円滑な単位互換制度を運営している。そのため、日本から海外の高等教育機関に留学した学生が、派遣先にて取得した単位(成績)については、グレーディングを行わず合格または認定等することが日本の大学の一般的な対応であり、本学も協定校で取得した単位については同様に学習成果の認定を行っている。本学と学生交換協定を締結している以下19校の海外学術協定校(アジア地区: 8校、ヨーロッパ地区: 11校)はECTS、UCTA、ACTSに基づく学習成果の認定を行っている大学が多く、各大学の教育内容が異なるものの、お互いの違いを公平に判断し、共通の枠組みの中で教育交流が出来る環境が整っている。

表1 日本経済大学の学生交換協定締結校一覧

大学名 都市(国・地域)	締結月日	プログラム
南台科技大学 台南(台湾)	1997年9月	英語
大連大学 大連(中国)	2013年2月	中国語
ラジャマンガラ工科大学 クルンテップ校 バンコク(タイ)	2013年2月	英語
東西大学 プサン(韓国)	2013年3月	英語 韓国語
ホンバン国際大学 ホンバン(ベトナム)	2013年11月	英語
コズミンスキ大学 ワルシャワ(ポーランド)	2016年1月	英語
崇実大学 ソウル(韓国)	2018年2月	英語 韓国語
培花女子大学 ソウル(韓国)	2018年12月	韓国語
東亜放送芸術大学 キョンギド(韓国)	2019年4月	英語 韓国語
ヴィタウタス・マグヌス大学 カウナス(リトアニア)	2020年7月	英語
ウラジオストク国立経済・サービス大学 ウラジオストク(ロシア)	2020年7月	英語 ロシア語
ニジニ・ノヴゴロド国立言語大学 ニジニ・ノヴゴロド(ロシア)	2020年7月	英語 ロシア語
キエフ国立言語大学 キエフ(ロシア)	2020年8月	英語 ロシア語
ネフスキー言語・文化大学 サンクト・ペテルブルグ(ロシア)	2020年8月	英語 ロシア語
ノボシビルスク国立工科大学 ノボシビルスク(ロシア)	2020年8月	英語 ロシア語

大学名 都市 (国・地域)	締結月日	プログラム
ベラルーシ国立大学 ミンスク (ベラルーシ)	2020年9月	英語 ロシア語
ラトビア大学 リガ (ラトビア)	2020年10月	英語
リヴィウ国立工科大学 リヴィウ (ウクライナ)	2020年10月	英語 ロシア語
エストニアビジネススクール タリン (エストニア)	2020年12月	英語

2020年12月時点

そのため、本稿においては教育内容、難易度、質、学習時間、学習成果等が客観的に把握できる①の学生交換協定に基づき長期交換留学プログラムに参加した本校福岡キャンパスの学生以下12名を対象にアンケートを行った。アンケートを提出してくれた学生は11名であり、すべてが日本人学生であった。アンケートを提出しなかった学生は韓国からの留学生で商学科4年次に大連大学に留学した1名のみであった。

表2 日本経済大学の学生交換協定に基づく留学生一覧

留学時期 (期間)	留学先 (国・地域)	留学時の 年次	プログラム	所属学部	性別	回答 有無
2016年秋学期～ (1学期)	大連大学 (中国)	3	中国語	経営法学科	男	有
2016年秋学期～ (1学期)	大連大学 (中国)	4	中国語	商学科	男	無
2016年秋学期～ (1学期)	ラジャマンガラ工科大学クルンテップ校 (タイ)	3	英語	経営法学科	男	有
2016年秋学期～ (1学期)	ラジャマンガラ工科大学クルンテップ校 (タイ)	3	英語	経営学科	女	有
2017年春学期～ (1学期)	コズミンスキ大学 (ポーランド)	2	英語	経営学科	女	有
2017年春学期～ (1年間)	ラジャマンガラ工科大学クルンテップ校 (タイ)	2	英語	経営法学科	男	有
2017年秋学期～ (1学期)	東西大学 (韓国)	3	韓国語	経営学科	女	有
2017年秋学期～ (1年間)	南台科技大学 (台湾)	2	中国語	経営学科	男	有
2018年秋学期～ (1学期)	東西大学 (韓国)	3	韓国語	経営学科	女	有

留学時期 (期間)	留学先 (国・地域)	留学時の 年次	プログラム	所属学部	性別	回答 有無
2019年秋学期～ (1学期)	南台科技大学 (台湾)	2	中国語	経営学科	男	有
2019年秋学期～ (1学期)	南台科技大学 (台湾)	3	中国語	経済学科	男	有
2019年秋学期～ (1年間)	南台科技大学 (台湾)	2	中国語	経営学科	男	有

3. アンケート内容

アンケートは7部から構成され、全部で25問である。

- (1) 留学者の基本情報 (全3問)
- (2) 留学年次と留学を決めた時期に関するアンケート (全3問)
- (3) 留学で得られたことに関するアンケート (全3問)
- (4) 留学目的に関するアンケート (全5問)
- (5) 留学後のキャリア構成に関するアンケート (全4問)
- (6) 本学のサポート体制に関するアンケート (全5問)
- (7) 海外渡航の危機管理に関するアンケート (全2問)

表3 アンケート内容 (抜粋)

1. 留学者の基本情報
 - (1) 学科をお答えください。
 - (2) コースをお答えください。
 - (3) 所属キャンパスをお答えください。
2. 留学年次と留学を決めた時期
 - (1) 留学した年次をお答えください。
 - (2) 留学を決めた時期をお答えください。
 - (3) 留学に関して相談した人を教えてください (複数回答可)。
3. 留学で得られたこと
 - (1) 留学にはどのようなメリットがあると思いますか。
 - (2) 留学にはどのようなデメリットがあると思いますか。
 - (3) 留学を通じて、自分にはどのような変化がありましたか。
4. 留学目的
 - (1) 留学した地域を教えてください。
 - (2) 留学した理由を教えてください (複数選択可)。
 - (3) 今後、もう一度留学したいと思いますか。
 - (4) 留学したい地域・国を教えてください。また、その理由を教えてください。
 - (5) どんな形式の留学に興味がありますか (複数選択可)。

- 5. 留学後のキャリア構成に関して
 - (1) TOEIC、TOEFLなどの語学試験を受けたことはありますか。
 - (2) 卒業時まで、どの語学試験を伸ばしたいですか。
 - (3) 留学は自身のキャリアプランに役立つと思いますか。
 - (4) 将来目指す就職先、職業または進路について決まっていますか（複数選択可）
- 6. 本学のサポート体制について
 - (1) 留学前に国際部より留学サポートをしてもらったか。
 - (2) 留学中に国際部より留学サポートをしてもらったか。
 - (3) 留学後に国際部より留学サポートをしてもらったか。
 - (4) 留学をする際、必要だと思うサポートは何ですか（複数選択可）。
 - (5) 留学をする際、知りたいことはどのようなことですか（複数選択可）。
- 7. 海外渡航の危機管理に関して
 - (1) 海外渡航の際の危機管理について重要だと思うことを教えてください。
 - (2) そのほか海外留学に際して不安に感じていること、制度上の不満等がありましたら自由にお書きください。

4. アンケート結果と分析

4.1 留学を決めた時期

留学をした学生は上記表2のとおり、2年次か3年次に集中している。留学に関する説明会が実際に留学を希望する時期の半年前に実施されるため、1年次に留学をする学生はおらず、また4年次は国内の就職活動にかぶるため留学を希望する学生はほとんどいない。唯一4年次に留学した韓国籍の学生は内定先で中国語が必要になることから4年次の秋学期に留学をしている。

また、日本の学生に関して、留学を決めた時期を調査したところ、以下の通りとなった。

表4 留学を決めた時期

時期	入学前	1年次春	1年次秋	2年次春	2年次秋	3年次春	3年次秋	4年次春
人数	3	0	1	3	3	1	0	0

留学を決めた時期は参加学生によって異なるが、留学をした学生12名のうち長期交換留学プログラムに参加する前に海外短期研修参加した学生は9名にものぼる。海外短期研修に参加し学んだプログラムと長期交換留学で学んだプログラムがおおよそ一致しており、短期留学に参加した学生が長期のプログラムに挑戦する傾向が高い。これは他大学でも同様の傾向であり、大学の海外研修だけでなく高校が実施した海外修学旅行や語学研修プログラムに参加した学生を含めるとさらに増えることが推測される。

また、留学するにあたり、多く参加学生は経済的な面を不安に感じ保護者と相談している。一方、留学制度や留学環境（特に治安）に関しては、友人や教職員に相談しており、留学生との交流経験の有無についても留学意識に影響していることが推測される。

4.2 留学から得られたこと

留学をした学生からは、「慣れない環境で生活したことで、様々な変化に適応するための柔軟性がついた」、「海外で友人を作ることができて自分の価値観が変わった」、「海外で生活し授業をうけたことで語学力が伸びた」など実体験から得られたところは大きいようである。さらには、皆一様に「自信がついた」、「価値観が変わった」など自分を見つめ直すよい機会にもなったようである。

一方、「留学にはお金がかかるため親に負担をかけてしまった」、「食文化になじむのに時間がかかった」、「単位認定が不安だった」と不安の声も複数上がってきた。食文化や単位認定については、留学前からの不安でもあるため、留学説明会だけでなく個別に相談会を行い現地での学習・履修に関する不安を軽減することも十分可能である。留学費用については、渡航する国によって留学費用のバラツキがあるものの、ほとんどの費用を親が負担しており、今後は格安なプログラム開拓も検討していく必要がある。

4.3 留学目的

渡航先は5ヵ国5協定校であり、参加した学生の留学までの目的は様々であるが、アンケート結果をもとに大きく3つに分類される。

表5 留学の目的（複数回答可）

留学目的	男性	女性	計（名）
語学力を伸ばしたいから（英語）	3	2	5
語学力を伸ばしたいから（中国語）	4	0	4
留学する国に興味があるから	5	3	8
留学費用が安いから	5	2	7

英語や中国語などの言語力を伸ばしたいと思い留学をしている学生が大半であり、主な留学の目的となっている。しかし、語学力を伸ばすためだけに留学を決める学生は少なく、留学にかかる費用から最終的に渡航先を絞り込んでいる学生が多いため、留学目的は上記表5の3つの理由にある程度絞られる。1名は親や友人、教員からの紹介で留学をした学生がいるが、それ以外の学生は上記理由にいずれかに該当している。

また留学を体験した学生のうち9名が再度1年以上の長期交換留学ないしは語学留学をしたいと思っている。渡航先は主に英語を伸ばしたいと思い留学した学生はアメリカかイギリスなどの英語圏、中国語を伸ばしたいと思い留学した学生は北京や香港、韓国語を伸ばしたいと思い留学した学生はソウルを希望している。いずれも物価が高く留学するには経済的負担が大きいエリアで今後このエリアの開拓をいかに進めるかも検討していく必要がある。留学を希望しない2名は、「就職活動をするために時間がない」、「留学でしたいことが決まったのでその時間に当てたい」と答えており、海外留学の経験を不定するのではなく、前向きに進むために自分の時間を確保したい理由が多かった。

4.4 留学後のキャリア構成

アンケートの対象となった学生の全員が留学は、「自身のキャリアプランに役に立った」と答えているが、実際に留学で学んだ言語を深めて就職活動まで展開した学生は2名のみであった。その2名は、韓国に留学した1名については韓国で就職をし、もう1名についてはタイに留学した1名で現在は服の買い付けなどで年間の多くの時間をタイを中心に過ごしている。それ以外の学生は言語力を活かした就職を行っておらず、現在就職活動をしている学生も渡航先で身につけた語学力を活かすことは考えていない。その理由の多くが「1学期（ないしは1年）の留学だけでは十分な語学力が身についたと思えない」ことが大半の理由を占めていた。

留学前に留学先で留学プログラムの言語を勉強しているが、語学試験まで受けていない学生が半数以上をしめ、帰国後も受験しない学生が大半を占めるため、語学力を高めるためには留学前から留学後も継続的な学習環境を整える必要があることがうかがえる。

4.5 留学のサポート体制

日本経済大学は2016年度に初めて交換留学生の送り出しを開始するにあたり、留学実績や渡航先の情報、ビザ申請、学内手続きなどを学生とともに作り上げていく形になったため、国際部の業務もプログラムが進むにつれて整理されていったのが現状である。

具体的な国際部の業務は、留学前に留学説明会を行い各留学プログラムの詳細、危機管理に関する情報や渡航先の情報を説明し、留学を希望する学生には個別ミーティングを実施している。留学中は月1回の月次報告書を提出させ報告書で気になる学生がいた場合は随時連絡を取り合うようにしている。留学後は帰国報告書さらには帰国後個別面談会を行い単位認定についての説明及び教務課へ提出するための書類作成サポート、さらには就職活動の相談をおこなっている。その成果が以下表6に表われており、今後も継続したサポート体制を作っていくことが求められる。

表6 国際部のサポートに関するアンケート結果

留学前	サポート有	10	・志願書やビザのサポートをしてくれた ・留学に関して事前にある程度情報をくれた
	サポート無	1	・一期生としてトラブルや留学に関する手続きなどなるべく自分で解決するようにした
留学中	サポート有	9	・毎月相談にのってくれた
	サポート無	2	・留学中は自分で困難を乗り越えたかったので相談しなかった ・留学中大きなトラブルがなかった
留学後	サポート有	10	・単位交換の相談に乗ってくれた ・就職活動の相談にのってくれた
	サポート無	1	・特に記憶に残っていない

しかし、「留学をする際にさらに知りたいことを教えてください」と問いかけたところ、「留学でか

かる具体的な費用をもっと知りたい」、「留学先の現地情報や治安情報をもっと知りたい」、「留学先で生活していくのに必要な語学力を知りたい」など国際部として説明すべき情報が不十分であることは否めない。現在は留学した学生が作成した終了報告書を留学希望者が全員閲覧できる状況にしており、各大学の情報や具体的な留学費用など学生が知りたがっている情報を知ることができる。しかし、交換留学プログラムの実績がない新規の協定校については、協定校から前もって学校情報や治安情報などを事前に入手しておくことが求められる。

4.6 海外渡航の危機管理

留学中のリスクマネジメントについては、本学は留学前の個別相談会で実施しているためか、参加者全員が「留学中は各自がしっかり危機管理意識をもって行動すれば問題ない」と答えている。しかし、今後交換留学プログラムの参加者が増える場合は、外部講師による講義を行い、質疑応答を複数回は設け治安への不安や渡航先での危機管理を高めることは求められてくる。また渡航先にあわせて学生自らが現地の食生活や気にすべき疾患など調べ学習を促すことも必要といえる。

5. アンケート結果に見る今後の課題

日本経済大学の交換留学プログラムに参加した留学生のアンケート結果から、今後国際部として実践を行うことが望ましい事項を3点挙げ、結論として位置づけたい。

第1に留学前に渡航先で生活するために語学力をいかに高めるかである。本学は、2010年以降3,000人を超える留学生を受け入れており、わが国でも屈指の多文化教育環境をキャンパス内に構築している。そのため学内にて「生きた言語（英語、中国語、韓国語など）」に触れる機会が多いはずであるが、実際に「生きた言語」に帰国前や帰国後に触れた学生は圧倒的に少ない。他大学の調査でも、キャンパスの国際化を目指しているが学生の8割以上が留学生との交流経験がないまま卒業している。そのため、留学に参加した学生の多くが留学先で学ぶプログラムを大学の授業でしか学ぶことができなく、授業以外で触れ合う機会をいかに作っていくかが求められてくる。英語でいうと、一般的に母語話者との会話が理想的だと考えられがちだが、近年はむしろ非母語話者の方がよいモデルになるとの見方が広がっている。本学には英語が母国語の留学生も多くいるがネパールやバングラデシュ、中国など日本より英語力の高い国からの留学生も多くいることから、彼らとの交流会を設けることも検討すべきである。また韓国語や中国語を学びたい学生は、日本語ができる母語話者が多く学内にいることから留学生を管理している国際交流センターなどと協力して交流会を設けることも検討すべきである。

第2に海外留学を望む学生に対して、いかに交換留学プログラムに参加してもらうかである。本学の海外短期研修には毎年全キャンパスで30名を超える学生が参加しているが、交換留学プログラムに志願する学生は若干名である。費用面での心配もあると思うが、留学に対する漠然とした不安や留学のきっかけをつかめない学生もいる。留学を希望する理由は多様であるが、留学から戻ってきた学生との交流会や事前学習会などを企画していくことで交換留学プログラムに参加を希望する学生の数が増えることも期待できる。そのためにも、語学の授業の中で留学を体験した学生を参加させ、留学に

ついて考える機会を増やすことも今後望まれる。

第3に学生たちの留学に対する期待の大きさについて着目したい。2020年度は新型コロナウイルスにより全ての現地留学プログラムが中止になった。しかし、留学に関する説明会を2020年9月さらに2021年1月にオンラインにて実施したところ全キャンパス合わせて100名を超える学生が集まった。新型コロナウイルスが発生するまでは、留学に関する説明会を実施しても年間で30名を超える参加者が集まったことはなかったが、世界情勢の変化もあって留学に対して期待している学生が増えていることが明らかになった。また、今までは各キャンパスが単独で様々な留学プログラムに関する説明会を行っていたが、2021年度からは全ての留学プログラムに主担当者を決め、説明会日時をオンラインにて一本化することで情報が統一化され、プログラムの内容について学生が即時に知ることが出来る環境作りが構築されつつある。しかし、留学を期待する学生は「語学力の向上」だけでなく「自らの人間的な成長を求めている」ことや「将来の選択肢を増やす」ことを目的に参加を検討している学生もいることから、各キャンパスで留学の事前相談会を個別で開催し、留学さらには将来のキャリアプランについて寄り添い見届ける環境を整えていくことが望ましい。

6. 結び

本稿では2016年度以降に本学と学生交換協定を締結した海外の学術協定校への長期交換留学に参加した学生を中心にアンケートを行った。交換留学プログラムに参加した学生の留学までの葛藤、悩み、さらには留学への目的など異なるにもかかわらず、帰国後は「日本のよさを再発見することができた」「自分を見つめ直すよい機会になった」と共通の意見がでてきた。これは今回のアンケートの対象外となった短期留学に参加した学生や認定留学に参加した学生でも感じることはないだろうか。しかし、一般的な学生の多くが海外行きを考え情報誌やインターネットにあたりはしたが諸手続をすする面倒臭さや自信のなさから留学を取りやめたり、留学斡旋業者を利用していることが多い。

今後本学から海外へ留学する学生数の増加を考えていくのであれば、経済的支援や就職活動など留学を阻む一般的な外因要因を除き、いかに留学への動機付けを行い内的要因から留学を決める学生を増やしていくことが求められる。さらには現在国際部で使用している「日本経済大学版留学ハンドブック」だけでなく1つのプログラム毎にパンフレット作成し、手続きやプログラム内容がわかりやすく、より身近に挑戦しやすい状況を作ることが求められる。そのために、国際部として留学の動機付けを如何に行っていくかを含め、今後1つずつ段階的に取り組んでいきたい。

文献一覧

- 小野嘉夫 (2000).「ヨーロッパ単位互換制度 (European Credit Transfer System) について」, 大学評価・学位授与機構研究紀要.
- 隈本・ヒーリ順子 (2014).「日本人学生の海外留学動機づけに関する要因」, 大分大学国際教育研究センター年報.
- 黒宮亜希子, 橋本由紀子, 金沢, 真弓 (2016).「海外留学に臨む大学生の実態と課題について」, 吉備国際大学研究紀要.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2020).「2018年 (平成30) 年度日本人学生留学状況調査結果」.
- 林隆之, 金性希, 森利枝, 齊藤貴浩, 鈴木賢次郎 (2012).「海外の高等教育機関との連携・共同を伴う教育プログラムに関する調査」.
- 堀田泰司 (2017).「行動教育のグローバル化と学生の流動化 - アジア共通単位互換制度の発展と学生の流動性への萍郷 -」, 高等教育研究, 第20集.
- 松田節子 (2002).「学生の語学留学について : アンケート調査をもとに」, 沖縄国際大学外国語学会.

